

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 24 日現在

機関番号：25406

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520227

研究課題名(和文) 権門都市宇治の歴史的展開を視点とした院政期文学再評価のための基礎的研究

研究課題名(英文) A Study of Narrative Literature Based in Uji, in 11-13 Century

## 研究代表者

西本 寮子 (Nishimoto, Ryoko)

県立広島大学・人間文化学部・教授

研究者番号：70198521

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、権門都市として発展、展開した院政期の宇治に注目し、歴史学・考古学等関連諸学の研究成果を踏まえて、都と宇治の二つの拠点を持つことになった摂関家の周辺で成立した文学作品や、宇治を一つの拠点として育まれた文芸について、再評価を試みたものである。具体的には藤原頼通の時代に焦点を合わせ、『源氏物語』の達成を受けて成立した『狭衣物語』や『とりかへばや』などの中世王朝物語について、当該時代の政治状況や文化事象の反映の様相の解明を試みた。

研究成果の概要(英文)：Fujiwara Yorimichi acted as a Chancellor for 50 years, and, meanwhile, many literary works were made around him. The purpose of this research is to make it clear what happened at the time while he was a Chancellor, and to explain what kind of influence on some works. The influence of the affairs that happened at that time, was seen in The Tale of Sagoromo. The result of the consideration was summarized in three theses.

研究分野：日本古典文学

キーワード：宇治 藤原頼通 中世王朝物語 狭衣物語

1. 研究開始当初の背景

(1) 学術的背景

杉本宏氏が「平安時代の宇治を発掘する」(『佛教芸術』279号、2005年)で指摘したように、宇治は、都の衛星的な位置関係にあるという地理的条件により関心が持たれにくかったこと、平安時代の遺跡調査が立ち遅れていたことなどの理由により、近年まで史的コンテクストの中で論じられることは多くなかった。しかし、近時、発掘調査を中心とする考古学的研究が進み、歴史学等、他の隣接諸学の研究の進展とも相俟って、11世紀から13世紀に至る権門都市としての輪郭と実態が立体的に思い描けるようになってきた。

そのなかで、藤原撰家家の盛衰と歩調を合わせて多くの文学作品を生み出す舞台となった宇治の変容は、藤原道長が木幡に浄妙寺を建立した11世紀初頭に始まる。三昧堂の建立のために人や物資が行き交ったことが、都から宇治への道筋にあたる木幡周辺の様相を次第に変化させたと考えるのが普通であろう。同様にその南に位置する宇治は、古くから交通の要衝として繁栄していたが、13世紀初頭ごろまでには碁盤目様に区画が整理された都市的景観を持っていたことが発掘調査によって明らかになったという。商業都市としての相貌を呈していたことが確認されたのである。社会構造と経済活動の変化は文化にも影響を与える。だが、そのような経済活動の展開を背後に持つ景観の変化と文学との相関関係はいまだ解明されていない。

文学の世界での宇治は、喜撰法師の「我が庵は都のたつみしかぞすむ世を宇治山と人はいふなり」に代表される隠棲の地、祈りの地としてのイメージで語り継がれていく。したがって、『古今集』以来定着したイメージの漂う資料についての研究は行き届いている。とりわけ『源氏物語』の重要な舞台であることから、歴史、風土、地形など生活文化と関わらせる形で、宇治を舞台とする文学の研究、『源氏物語』研究の一領域としての研究が早くから進み、成果を上げてきたことは紛れもない事実である。とは言え、上に記した考古学的アプローチのほか、近時飛躍的に研究が進んだ史料学、地理学等からのアプローチにより明らかになった事実、成果との関わり方の検証については必ずしも十分とは言えないのが現状である。さらに、後期物語の時代以後は、その親疎関係に差はあるものの、宇治を舞台とする物語が出現するが、宇治がこの期の人々の生活基盤の一つであったことを意識して読まれることはあまりない。『源氏物語』すなわち都を舞台とした物語との関係の追究にとどまっているのである。

(2) 本研究がめざす研究成果

稿者はこれまで、平安後期物語および中世王朝物語と総称される物語文学を主たる対象として研究を続けてきた。当該時代は、道

長以後の撰家家が、血脈を受け継ぐ後継者を思うように得られないなかで、その存立基盤を築くために模索を続けた時期である。その舞台の一つが平等院を中心とする宇治の地であった。それにもかかわらず、道長以降急速に繁栄、発展、展開した宇治の現実との懸隔を人々はどのように表現したのかという視点からの整理や研究はほとんど進んでいない。記録類に記載された宇治に関わる「事実」と、『栄花物語』が記す、目的をもって再構成された「歴史」との間には隔りがある。頼通の時代以後の物語文学は、時代が下れば下るほど、その物語内社会が描き出す「歴史」のよりどころを『栄花物語』に求めるようになると考えられる。史実との関わりに注目して物語研究をしていながら、生活に根ざした思考法に目が向かなかつたのは迂闊であった。そこから、隣接諸学の研究の進展と停滞気味であった『源氏物語』以後の物語文学研究の現状に気づき、『源氏物語』研究の延長線上にあるイメージによって記述された「宇治」に加えて、現実世界の、権門都市という新たな性格に配慮した資料の洗い直しと、再評価の必要性を痛感するに至った。

院政期を生き抜いた撰家家とその周辺の人々は、基盤として選んだ政治の拠点であり、権力の象徴としての意味合いを持つ宇治で、景観の変化を目の当たりにしながら、伝統的なイメージをどのように捉え、相対化し、新たな文学作品を生み出していったのだろうか。そのことを解明するためにはこの期の文学活動全般の整理が必要であろう。人々の文化的営みを、隣接諸学の深化を視野に入れて整理、評価することが必要な時期に来ている。このような視点で、宇治という地に焦点を絞って考察することにより、物語文学研究は新たな一歩を踏み出すきっかけになると確信するものである。

(3) 本研究の特色

隣接諸学の研究の成果を取り込み、虚構の文学作品であれ、当該文学作品を、成立した時代の中で総合的に捉え直すという発想が生まれた背景には、戦国期の毛利氏の文化圏の周辺を対象とした日本史と国語国文学の共同研究、英文学や中国文学研究者を加えた宮島学研究に参画した経験が生きている。このような学際的共同研究の重要性は、2010年10月に立命館大学で開催された中古文学会秋季大会のシンポジウムにおいて、片平博文氏が強く訴えかけられたことでもある。片平氏は、『枕草子』を例として、歴史地理学研究成果が1000年前の文学作品の背景や成立事情を探る研究に成果をもたらすことを実証的に検証、報告され、共同研究の重要性を説かれたのである。さらにこの中古文学会に先立つ同年の8月9日～11日にかけて伊勢で開催された古代文学研究会大会において、「言の葉の創造力 歌と物語と史実の交渉

」と題するシンポジウムが行われた。かねてより院政期文学の研究に携ってきた稿者はパネリストとして参加し、「景観の変化と和歌 頼通の時代の宇治」と題する基調報告を行う機会を得た。宇治が権門都市として発展していく過程において、人々の移動に伴う未知の地への関心の高まりや歌枕の変化が、宇治の地を拠点に活動した撰関家の一人である頼通主催の歌合や周辺の歌人の詠歌にいち早く取り入れられたことが窺われること、地方官を務めた経験のある歌人たちによって構成される、いわゆる和歌六人党の周辺で新たな兆しが芽生えた可能性があること、新たな名所の発見が歌枕に変化をもたらした事例が見られること、新たな歌人たちの動向が物語創作に関わった女性たちにも影響を与えたことなどを報告し、大方の賛同と相応の評価を得た。当日のディスカッションはのちに「考古的・地理的な研究成果を文学研究の中により豊かに生かしていくための研究実践」「和歌と史実が交渉する場として、宇治という地を見いだした」(『古代文学研究』第2次、20号、2011年10月)と表している。

## 2. 研究の目的

本研究は、隣接諸学の研究の深化、とりわけ、考古学的研究の成果によって明らかになってきた11世紀以後の権門都市宇治の景観の変化を踏まえ、撰関家の権威の象徴として、また政治文化都市としての機能を持つに至る12~13世紀にかけての宇治の変容と文芸活動との関わりを探るため、当該時期に成立した物語文学や頼通周辺の文学活動を知ることができる史資料、記録、論考などを再整理することを試みる。これにより、新たな都市・景観の成立の背景に見え隠れする庇護者、創作者、享受者を取り巻く環境の変化が文学作品に与えた影響と変容について考察し、都に加えて宇治を成立基盤とする文学作品の再評価を試みることを目的とするものである。

## 3. 研究の方法

具体的には、まず、1.(3)に記した、既に着手した予備的な研究を発展させることを目指す。

次に、これまでの物語研究において江戸時代後期の和学者たちの間でつくり物語が歴史を知るための資料として読まれていたらしいことを改めて認識したことから、物語の享受の問題を考えるには物語の成立基盤としての時代の問題、経済状況の変化を含めた環境の問題を検討してみることが必要であると考え、隣接諸学の研究の深化と展開に応じてとらえ直す観点からのアプローチを試みることにした。作者が生きた時代や環境、生活空間や風土に近づいてみて初めて見えるものがあると考えからである。その意味では、いわば動かぬ証拠として出土した考古

学的資料を視野に入れる必要がある。宇治に限定することなく、京都の市街地の発掘調査の結果をも視野に入れて、発掘資料に関わる報告書やそれに準ずる資料の収集に努めることとした。

さらに、『源氏物語』をはじめとして宇治を舞台とした物語を中心とする文学作品、または宇治で詠まれた和歌などについて、地名としての「宇治」当時周辺の地名の出現の仕方についての情報整理、先行研究の整理を行う。併せて詠草類、歌合資料などを収集、記録類から宇治に関連する記事を抽出、整理、解読を進め、その上で、経済活動の変化、宇治周辺の景観の変化の様相と、歌などの変容、物語の舞台の変化などを実地での検証を踏まえて考察に加える。

ただし、作業が冗漫になるのを避け、作業量を適正に保つため、収集・考察の対象は頼通の時代、さらには頼通が庇護した禊子、祐子両サロンの周辺を中心として、その前後に限定する。浄妙寺建立以後の撰関家の盛衰と絡めて文芸活動がどのような社会変革に基づいて展開したかを総合的に検討することに絞り込む。

さらに具体的には次の通り進めることとした。

(1) 一年目は、平安後期物語、中世王朝物語について、地名表現に注目して読み直す。物語の舞台として選ばれた「地」の歴史的空間的広がりや物語世界の奥行きとの関係を考えながら、物語文学とその周辺に登場する地の変化の様相を確認する。また、津本信博氏の「城南別業と歌人 後冷泉朝歌壇の宇治殿・富家殿・伏見邸」(1984年)以後、久保木秀夫氏『更級日記』上洛の記の一背景 同時代における名所題の流行 - (2004年)、高重久美氏『和歌六人党とその時代』(2004年)などに、地名に対する関心や時代の変化を視野に入れた考察や和歌研究の成果を踏まえた新たな資料に基づく研究が認められるものの、いまだ十分とは言えない。先行する和歌研究の成果を手がかりとして、物語文学が成立する背景、基盤としての文学環境の整理、研究を進める。さらに、地名表現および研究情報の収集に努め、基礎資料の充実を図る。

それに加えて、歴史研究の成果として『宇治関白高野山御参詣記』が発掘され、末松剛氏、小倉久美子氏らによって読解が進められている。文学研究の成果と歴史研究など隣接諸学の研究成果についての情報収集をおこなうとともに、専門家との意見交換などを行い、関連する領域の研究会などに積極的に出向く。

(2) 二年目、三年目は、隣接諸学の研究とのすりあわせを視野に入れて情報収集を行う。併行して、歴史学研究者からの助言を得て実地踏査を行い、文学作品における虚構化の実態についての考察を進める。『狭衣物語』に係

る、科学研究費による研究成果『『狭衣物語』を中心とした平安後期言語文化圏の研究』、『夜の寝覚』の地名を作者の行動範囲の広がり重ね合わせる横井孝氏の一連の研究、表記に関する研究成果をまとめた和田律子氏の『藤原頼通の文化世界と『更級日記』』を視野に入れ、これらの研究に関与した研究者と情報交換を行いながら頼通文化圏の特徴を考察する。

(3) 研究期間を一年延長した四年目は、作業の遅れを取り戻しつつ、総まとめとして補完調査を行いながら考察を続け、隣接諸学の研究状況を整理し、研究成果を論文の形にまとめて公表する。

(4) 本研究費採択決定後に決まった勤務校での職務により、当初計画を若干縮小して研究を展開せざるを得なかった。具体的には、50年の長きにわたって閑白の地位にあり続けた藤原頼通が庇護者であった時代の文化事象と、その文化事象に影響をおよぼした事象の整理、およびその最末期に成立したとおぼしい『狭衣物語』とその影響のもとに成立したつくり物語にほぼ限定して資料、情報収集、考察を行った。

#### 4. 研究成果

主な研究成果は以下のとおりである。

(1) 所領の拡大に伴う人的移動と必要とされた新たな拠点

撰関家は道長の晩年以降、寄進された荘園を中心にその影響が及ぶ領地、地域を拡大していった。荘園史料によって撰関家領の拡大については確認した。この動きに伴って、秩序ある支配を保つために、配下の官僚たちの派遣による人的手配、支配が行き届くよう新たな拠点づくりが必要とされた。その過程で必要とされた新たな拠点が、藤原氏の氏神である春日社のある奈良と都の中間点にある宇治であったと考える。累代の墓所である木幡という拠点到浄妙寺を建立した道長は、経済的基盤を強化するために別邸を入手したのではなかったか。道長が入手した別邸を拠点としたのは、単に別荘として利用するためでも、文芸の拠点でもなく、経済の拠点として宇治を重視する考え方がめばえ、拠点が必要だったからである。以後、宇治は都市機能を有した藤原撰関家のもうひとつの拠点として展開していく。

その別邸を相続した頼通は、末法の世の到来を目の当たりにして、信仰の拠点として別邸を平等院とした。

しかしその一方で、代々の当主たちは巨椋池と重要な津を囲むように、それぞれの拠点を作っていく。撰関家の規模の拡大に伴って、経済基盤をより強固なものにするという意味合いがあったのではないかと考えている。たとえば、宇治川河畔に巖島神社があるが、これは、巨椋池、宇治川が単なる遊興の地ではなく、経済的拠点としての意味をなっ

いたことのアカシではないだろうか。

考えてみれば宇治は古来、経済、交通の要衝として経済活動が活発に行われていた。代々の当主の拠点が置かれた地の実地の地形を見る時、それが人的、経済的、政治的支配を行うために好都合な地点、言わば軍事的拠点でもあったことが容易に想像できる。それは、たとえば、後代、平家の人々が、日宋貿易と大陸につながる海の支配によって得た強大な経済力を背景に、地方へと続く道と都の出入り口を拠点に勢力を拡大し、支配をゆるぎないものにしていったのと同様の勢力拡大の構図である。その芽生えを、早く、11世紀から13世紀に至る藤原撰関家に見いだすことも可能である。軍事的拠点としての意味づけは、時代の進行の過程で少しずつ付加されていったと考えられるのである。

そして、もうひとつの重要な要素が道長の時代に深まっていった法華経信仰であったと考えている。道長、頼通が法華経信仰を背景として自ら移動、参詣を行ったことが、文芸の世界で表現の幅が広がっていった要因のひとつになったといえる。

人的支配については、支配地域の秩序を維持するため、配下の官僚たちが都と新たな所領との間を行き来することが増えたと思われる。支配者層との関係を保つためには、官僚にも一定の教養が必要とされる。そのような素養を備えた人々の移動の中から新たな風景の発見、名所の発見、確立などの動きが生じ、歌会などの場で具体的に活かされた。その中核にあって活動したのが官僚歌人、和歌六人党と呼ばれた人々であった。彼らの活躍により、頼通の時代の文芸は、その幅を広げていったと考えられる。

高重久美氏『和歌六人党とその時代』(2005年、和泉書院刊)に詳述されるように、六人党と呼ばれた人々は血縁関係でつながっている。職務上彼らを統括する人物の特性と、頼通が庇護した文芸サロンの中心人物の特性と血脈的繋がりから、新たな文芸が生みだされていった。祐子内親王のサロンでは、和歌活動に新たな動きが生まれ、禊子内親王のサロンではつくり物語の創作に変化がもたらされた。物語内社会にも空間的広がりが認められるのである。

なお、道長の浄妙寺建立を契機として徐々に都とは別の本拠地を宇治の地に持つようになった頼通以後の撰関家当主たちが活動の拠点とした地、具体的には木幡、白川を含む地域、法性寺から鳥羽殿に至る地域、さらには太閤堤、旧基実邸から発見された土塁をはじめとする旧巨椋池周辺に点在する、新たに発見された遺跡等を、院政期を専門とする複数の歴史学研究者とともに実際に歩いて検証したことは、今後の研究深化に資する大きな成果であった。具体的成果の一部はすでにまとめた論考に一部盛り込んだが、今後、さらに補完的な考察を行ったうえで、機会を

得て論文にまとめることを考えている。

## (2) 『狭衣物語』にみる頼通の時代の政治状況の反映

人的移動の拡大、新たな拠点の成立、信仰の深化はつくり物語の世界に、新たな地名の導入と物語世界の奥行きを広がりをもたらした。『源氏物語』に見られない地名として『狭衣物語』の粉川参詣記事にその一端が認められる。これについては、頼通が実際に行った粉川・高野参詣のルートが参考にされたとみている。道長の時代に行われた高野詣に加え、近時翻刻され、研究の成果が公表された『宇治関白高野山参詣記』に基づき、実際の景観との対応関係を確認した結果、その可能性があると考えるに至った。物語の作者が参詣に加わった人物から得た情報が反映されたものであろう。これについては、『狭衣物語』に見る頼通の時代」(5 参照)に於いて、現時点での考察の結果について一部言及した。今後さらに、末松剛氏による撰関家の儀礼確立の過程に関する一連の研究の成果を踏まえ、さらに考察を深める必要がある。なお、新たな風景の発見に関わっては、これまで知られてきた「日根」ではないもうひとつの「日根」の存在を指摘が指摘されている(川端新「もうひとつの日根荘—嘉承寺領和泉国日根荘について—」(『荘園制成立史の研究』、2000年、思文閣出版刊)、(1)で指摘したことと関わるが、歴史学研究の側からの発言を踏まえ、撰関家領の拡大、寄進荘園の拡大との関わりを視野に入れた考察をさらに深める必要があると考えている。

## (3) 『源氏物語』からの連続した時間軸の導入による物語の創作

清水婦久子氏が主張するように、『源氏物語』は撰関家の特定の人物を享受者として作られたという基本的特徴がある(『源氏物語巻名と和歌 物語生成論へー』、2014年、和泉書院刊)。この物語の作り方は、頼通文化圏でも継承されたと考えられる。和歌を基盤とした物語創作のあり方については、天喜三年の物語合に代表される営みを見れば理解されるところである。

一方で、『源氏物語』正編の世界が規範とされ、光源氏が物語世界で生きた時代を、時間的に作者と一義的な享受者が生きる「現在」に列なる「過去」とみなしてその続編を作る動きがあったとする考え方が提示されている。後藤康文「もう一人の薫」(『狭衣物語論考』、2011年、笠間書院刊)がその代表的な研究である。

これらの先行研究を踏まえた上で、(1)で記した成果を加えて考察を深めた。そして、『源氏物語』からの時間の「連続性」と、作者が生きた時代のできごとを物語世界に取りこむ「同時代性」に支えられて、『狭衣物語』の世界は成り立っていると結論づけた。

この考え方に基づいて、頼通の執政期に集

中のに勃発した「神託」を利用した訴えに着想を得て、六条斎院宣旨が物語世界を作り上げた可能性を指摘したのが「『狭衣物語』にみる頼通の時代」(5 参照)である。同様に、後継者の不在に苦慮する撰関家の苦悩を反映させる形で物語世界を構築している可能性を指摘したのが「大将たちの「もの思はしさ」 『源氏物語』を継ぐ時代のつくり物語一」(5、(3)参照)である。後者においては、光源氏没後の世界を新たに作り出す試みが『狭衣物語』固有のあり方ではなく、『狭衣物語』が成立した時代の機運であった可能性を視野にまとめたところである。

## (4) その他

研究期間内に『源氏物語』『夜の寝覚』についてはそれぞれ藤本勝義源氏物語の表現と史実」(2012年、笠間書院刊)横井孝『源氏物語の風景』(2015年、武蔵野書院刊)が公刊された。本研究において取り組んだ課題に通じる視点から研究の進展があった。

研究成果をまとめるには至っていないが、稿者が取り組んできた『とりかへばや』においてはどのような達成があるのか、つくり物語の成立の「場」の特性の変化をどう捉えるか、『とりかへばや』が成立した12世紀の時代の状況はその時代の文芸にどのように影響しているのかについても、考察を進めつつある。今後に期したい。

## (5) 今後の展望

本研究によって、撰関家領の拡大に伴う経済的基盤の変化、人の動き、政治状況の変化等が頼通の時代の文芸の世界に影響を与えたと考えられることの一端を指摘できたと考えている。その意味では、和田律子『藤原頼通の文化世界と更級日記』(2008年、新泉社刊)をはじめとする先行研究の達成を、わずかながらも越えることができたと考えている。

文学作品には、先行する作品世界が受け継いできた伝統を踏まえた上で新たな世界を作り出していくという基本的な性格がある。その営みと、現実世界の撰関家のそのときどきの動向の文芸世界への反映がどのような関係にあるのか、さらに追究していく必要がある。隣接諸学の研究が急速に進んでいることから、つくり物語に限定したものはあるが、その研究成果を取り込むことの必要性に触れたのが「垣根を越えるために—中世王朝物語研究の課題—」(5 参照)である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌・研究書所収論文〕(計3件)

1 西本寮子、垣根を越えるために 中世王朝物語研究の課題、『中古文学』(査読誌) 依頼論文、2014、pp.54-61

2 西本寮子、『狭衣物語』にみる頼通の時代、

『考えるシリーズ 知の挑発』3 平安後  
期頼通文化世界を考えるー成熟の行方』、  
依頼論文、武蔵野書院刊、2016、pp.1-18  
(本報告作成時印刷中)

3 西本寮子、大将たちの「もの思はしさ」  
『源氏物語』を継ぐ時代のつくり物語、  
『国語と国文学』(査読誌)、2016、pp.1-14  
(本報告作成時印刷中)

[学会発表等](計1件)

1 西本寮子、垣根を越えるために 中世王朝  
物語研究の課題、中古文学会平成26年  
度春季大会ミニシンポジウム、2014.6、於  
立教大学

[図書](計0)

[その他]

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西本寮子(Nishimoto Ryoko)  
県立広島大学・人間文化学部教授  
研究者番号: 70198521